

京都大学は「越境する知の拠点」から 「循環する知の拠点」へ

更なる
発展へ

京都大学に適したURA体制を 「創設」「成長」「内在化」

将来 創出した知を循環

- ①新しい学術領域の創生
- ②国際協働の深化
- ③多様な人材の育成と輩出
- ④産官学共創の加速
- ⑤エビデンスに基づく戦略的運営

実績 越境する知を創出

- 国際・学際 新規プロジェクト 137件 創出
- 大学主催国際シンポジウム 26件 開催
- 海外拠点の設置・URAによる運営
- 新規学際研究グループ 61件 創出
- 新規大型プロジェクト代表者 170名 輩出
- 産業界との大型共同研究 12件
- 外部資金受入額 104億円 増 etc.

強化 越境する「知」「人」を生み出し、それらを分野・国境・アカデミア・制度の壁を越えて循環

貢献 日本の URA システムの先導的モデルとして日本の大学等をリード

改革 URA は 第三の職として京都大学に定着（内在化）プロボストを支えるカタリスト（触媒）へ

目的 5つの知の越境

- 学際 ①未踏領域・未科学への挑戦
- 国際 ②国際化の推進
- 人際 ③人材多様性の確保
- 産連 ④イノベーションの創出
- IR ⑤持続的最適化



中間評価結果

評点区分: S

全体に対する所見

当初計画は極めて順調に進捗しており、多様な取組を組み合わせることで目標を上回る実績を上げている。人文・社会科学系研究支援プログラムの構築も、全国的なロールモデルとして成果が期待され、これまでの取組を一層発展させ、着実な目標の達成が期待できることから、高く評価できる。

当初構想・計画の進捗状況に対する所見

学長のリーダーシップにより事業統括体制・実施体制が確立しており、URA のキャリアパスの明確化、KURA による研究力強化、IR シンクタンク等「全学一元化体制」による多面的・先進的な取組は高く評価できる。

今後5年間の将来構想に対する所見

自主財源による URA の雇用が既に始まっており、定着化への努力がなされている。また、社会的課題解決への取組、産学連携に向けた取組は画期的であり、着実な実施による目標の達成が期待できる。